GAKKAN GAKUFU 39

Introduction

着任教員自己紹介

上田 博人 [うえだ ひろと] 教授

総合文化研究科（言語情報科学専攻）から流動教員として情報学環に配属されました。専門はスペイン語学（とくに歴史的変化・地理的変異）、言語処理プログラミング、外国語教育法です。学部の授業では前期課程「スペイン語基礎」、後期課程「ラテンアメリカ言語論」「言語情報分析」「言語の変化・変異」、大学院（言語情報科学専攻）では「言語情報解析」を担当しています。研究ではスペイン語データを自作のプログラムで処理・分析しています。そして、スペイン語学に限らず一般の言語科学に応用できる新しい方法を開発することを目指しています。とくに言語現象の特異な歴史的・地理的分布の抽出法に興味があります。

苗村健 [なえむら たけし] 教授

2000 年に情報学環が設立された当初、最年少の流動教員として参画しておりました。当時は入学した学生の平均年齢が私より上で、一緒に新しい組織を創り上げる楽しい日々でした。6 年間の流動を終え、2006 年から情報理工学系研究科電子情報学専攻に戻り、学際情報学府の兼担を続けてきましたが、7 年ぶりに再び流動教員としてお世話になることになりました。専門は、拡張現実感やヒューマンインタフェースなどのメディア技術であり、学環では特にコンテンツデザインやインタラクションデザインに取り組み、一般向けの展示活動を重視してきました。学環に戻り、刺激的な先生方とご一緒することはもちろん、副指導などで多くの学生さんに接することを楽しみにしています。

菊地 大樹 [きくち ひろき] 准教授

史料編纂所から流動教員としてお世話になることになりました。専門は日本中世史です。史料編纂所では鎌倉時代の貴族の日記の研究・編纂・出版という課題を与えられ、研究しています。個人の研究テーマとしては、特に 8 世紀から 14 世紀ごろまでの民衆仏教を支えたヒジリたちの活動を追うことを通じて、中世仏教の思想的系譜を明らかにすることを目指しています。また、宗教史研究との関連で、中世の石造物・金石文史料研究も手掛けています。情報学環では、歴史学の立場から宗教史研究をベースとした史料学研究を学生の皆さんとともに進めることにより、歴史社会情報論について考えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

嶋田 正和 [しまだ まさかず] 教授

総合文化研究科から流動で来ました。進化生態学、行動生態学が専門です。昆虫を材料にし、食う―食われる 3 者系のカオス的動態や学習行動による頻度依存的捕食が引き起こす餌 2 種の交替振動などを、実験とモデルで解析しています。また、寄生蜂や珪藻などの性比調節の進化ゲーム理論も研究対象です。情報学環では、人間社会にも共通する現象、例えばニッチ構築論（生き物が環境を作り変えることで環境が自律的に遷移する）や進化ゲーム理論をもとに、人間のように非血縁者同士が協力社会を進化させる過程や文化の伝播・進化なども研究したいです。

石川 徹 [いしかわ とおる] 准教授

今年度よりあらためて情報学環・学際情報学府でお世話になります。総合分析情報学コースにおいて、空間情報科学、認知行動地理学、都市居住論の研究・教育を進めてまいりたいと考えております。とくに、現在社会的に取り組みが進められているユビキタス空間情報社会の実現、および地理空間情報社会基盤の整備に向けて、空間の認知・心理・行動という視点から貢献することができればと思っております。また、空間―情報―人間をつなぐ学問分野としての空間情報学という立場からも、学環・学府の掲げる学際的な研究・教育に貢献させていただければと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

松山 裕 [まつやま　ゆたか] 准教授

医学系研究科から流動教員としてやってまいりました。出身は、本学医学部・保健学科（現：健康総合科学科）で、生物統計学・理論疫学を専門としています。疫学（epidemiology）は、疾病・健康に関する事象を集団中で計量的に捉え、これらの原因や影響因子とその強さを評価し、最終的には予防手段につなげる実践の学問です。一方、生物統計学（biostatistics）とは、基礎・臨床・疫学といった医学研究において、どうデータをとるか（調査計画・実験計画）、どう解析するか（統計解析）の方法論を提供する応用統計学です。新薬あるいはより優れた治療法を開発するために行われる臨床試験においては、生物統計家の参加が必須ですが、わが国はその数が極端に少ないのが現況です。今後の生物統計学の発展のために日々努力しておりますが、情報学環では研究の幅をさらに広げていければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

Topics

河口洋一郎教授　芸術選奨受賞を語る

この度芸術選奨文部科学大臣賞を頂いた。ＣＧ部門では初の受賞となる。受賞理由は、昨夏新宿区の街全体で行った「河口洋一郎特別展」が契機となったが、学生時代からのＣＧ国際学会 SIGGRAPH 等を中心に展開している、論理的思考を基盤にした "the GROWTH model" による芸術表現活動に始まり、特に平成 24 年度の伝統芸能とのコラボレーションや "GROWTH：Tendril" についての展示、国内外での講演、近年の人工生命体による宇宙芸術の可能性へと及んだ、一連の造形に対する論理的思考に裏打ちされた、顕著な芸術・教育活動の業績に対して、というものである。

深海宇宙への探検は、種子島で育った幼少の頃からの夢であり、今もなおその夢を実現すべく研究を続けている。これまでの研究領域であるＣＧの世界のみならず、現実の世界で実現するために立体造形化し、さらにこれらの立体造形をロボットにして、時間と空間を乗り越え、遥かなる深海や宇宙へ連れて行きたい願望がある。惑星や銀河、ザ・ユニバースの盛衰、ダークマターも含めて、いつか一緒にサバイバルをしていきたいものである。

（左）作品「宙蝶 (Bucco)」と一緒に
（上）文化庁長官と河口洋一郎教授

西垣 通 教授　姜 尚中 教授 最終講義

永年にわたり、情報学環・学際情報学府で教育・研究活動に貢献されてきた西垣通教授と姜尚中教授が 2013 年 3 月末日をもって東京大学を退職されることになり、3月6日、福武ラーニングシアターにて、合同の最終講義が行なわれた。

演題は、西垣通教授『ラ・マンチャの情報学者』、姜尚中教授『これからの北東アジア』。西垣先生からは、研究の軌跡が語られるとともに、学環が真に学際的になるためには、OB・OG のネットワークが重要であるとのメッセージが、姜先生からは今まさに難局に直面している北東アジアがやがては " 北東アジア共同体 " として結ばれていくことへの強い思いが語られた。会場いっぱいに詰めかけた参加者はお二人の講義に熱心に聞き入り、名残惜しい貴重な時間を共有した。

講義の後の懇親会には初代学環長を務められた濱田純一東京大学総長も駆けつけ、お二人の新しい門出を祝福した。

学際情報学府 学位記授与式

3 月 25 日、安田講堂耐震工事のため、大学全体での学位記授与式は有明コロシウムにて午前中に挙行され、学府での授与式は午後から福武ラーニングシアターにて執り行われた。修士課程修了者 78 名、博士課程 9 名 (年度内既修了者 2 名含む) に須藤修学府長より学位記が授与され、学府長と石崎雅人専攻長から祝辞が送られた。

優秀修士論文発表会

3 月 25 日、学際情報学府学位記授与式に引き続き、福武ラーニングシアターにて優秀修士論文発表会が開催された。専攻長賞を受賞した社会情報学、文化・人間情報学、総合分析情報学、アジア情報社会の各コースの受賞者から一人ずつと、学府長賞に輝いた先端表現情報学コースの松井勇佑がそれぞれ受賞論文について発表を行った。

情報学環教育部 修了式

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて、情報学の体系的な教育を行う、大学院でも学部でもない異種混淆的な学習の場である。3 月 25 日、本館 2 階教室で、修了生 6 名に学環長より修了証が手渡された。当日は小雨が降り出し、室内での集合写真撮影となったものの、笑顔でそれぞれの健闘をたたえ合う温かい式であった。

人 事 異 動

教員	配置換 (転入)	4/1	上田 博人	教授 （総合文化研究科より）
			嶋田 正和	教授 （総合文化研究科より）
			石川　徹	准教授 （空間情報科学研究センターより）
			菊地 大樹	准教授 （史料編纂所より）
			松山　裕	准教授 （医学系研究科より）
			齋藤 大輔	助教 （情報理工学系研究科より）
		4/16	苗村　健	教授 （情報理工学系研究科より）
	配置換 (転出)	4/1	相澤 清晴	教授 （情報理工学系研究科へ）
			五十嵐健夫	教授 （情報理工学系研究科へ）
			山本 博文	教授 （史料編纂所へ）
			清水 晶子	准教授 （総合文化研究科へ）
	定年退職	3/31	西垣 通	教授 （東京経済大学へ）
	早期退職	3/31	姜 尚中	教授 （聖学院大学へ）
	辞職	3/31	山田 育穂	准教授 （中央大学へ）
		4/30	山本 隆一	准教授 （医学部へ）
	任期終了	3/31	石井健太郎	助教 （総合文化研究科へ）
事務職員	配置換 (転入)	4/1	山岸　正	事務長 （教養学部より）
			植木 祐輔	専門員 （本部情報戦略課より）
			濱田 大輔	会計係専門職員 （法学部より）
			清弘ひかり	図書係主任 （工学部より）
	昇任	4/1	鈴木佐智子	学務係主任
	配置換 (転出)	4/1	杉村 聖治	事務長 （文学部へ）
			松本 健一	会計係専門職員 （医学部附属病院へ）
			筒井 明子	図書係主任 （医学部へ）
	定年退職	3/31	菊地みつ子	専門員

News

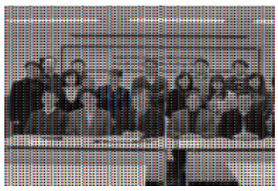
日台学生交流会開催報告

1 月 30 日、東京大学にて、台湾でジャーナリズムを学ぶ学生の交流会が開催された。日本の対台湾交流の窓口機関、公益財団法人交流協会が主催し、情報学環の林研究室と丹羽研究室の共催により行われ、台湾側から 20 名、日本側から 16 名が参加した。交流会では、共に昼食を摂りながら親睦を深めた後、グループに分かれ、「震災報道と自粛」「ネット時代に新聞はどう変わるか」「これからの新聞記者が担うべき役割」「メディアが科学を伝える意義」「インターネット時代のテレビ放送」「尖閣報道」「オルタナティブ・メディア」というテーマについて、言葉の壁を越え、熱い議論が繰り広げられた。(林研M２・武田勝成、丹羽研M２・木谷有里)

「東京メディア・ビオトープ」発表会

メディアとはテレビやコンピュータのことだけではなく、人と人のコミュニケーションの媒（なかだち）になる「もの」や「こと」全般をさす言葉だ。そのようなメディア論の観点に立ったときに、東京にはどのようなメディアが見出せるだろうか。教育部冬学期授業「東京メディア･ビオトープ」では、14 名の研究生たちが街に出て、小さなメディア（神田の古本屋、荒川区の路線バス、銀座の地方物産館など）に注目し、そのありようをデジタル・ストーリーテリング（写真数十枚にナレーションを加えたデジタルものがたり）にまとめた。2 月 7 日の発表会では活発な議論がかわされた。（担当教員：水越伸）

ワークショップから交流協定へ



3 月 1 日と 2 日、東洋文化研究所は台湾の中央研究院社会学研究所と第 4 回合同ワークショップを開催した。中央研究院社会学研究所以外に、高麗大学校や中国社会科学院社会学研究所、復旦大学からも研究者が参加。東京大学からはワークショップを主催した園田茂人教授のほか、人文社会系研究科から 2 名、法学政治学研究科から 1 名、学際情報学府から 3 名の学生が報告した。最後の総括セッションで高麗大学校社会学科の Kim Chul-kyoo 教授から、「今後とも大学院生の交流活動を継続するため、東京大学と箇所間協定を結びたい」という提案がなされ、現在、学際情報学府と箇所間協定を締結する事務的な手続きが進行しているところである。(教授・園田茂人)

池上高志教授主催 シンポジウム リポート

ポテンシャルとしての情報学環のありかたや、駒場の看板であるはずの「総合文化」の現状を危惧し、C.P.Snow の「２つの文化」の現代版として、今なお激しく進行する理系と文系の溝、「2 つの文化」をどうするべきか、駒場での情報学環の活動はそこでどのような意味を持ちうるのか、ひろくは大学の存在意義とは？

そうしたことについて、3 月 6 日、駒場 18 号館で、議論をかわしてもらった。スペシャルゲストとして、駒場出身、現在はフリーで大活躍中の、鈴木健さんと森田真生さんに登場してもらい、また情報学環とは関係ないところで、鳥の歌文法研究の第一人者の岡ノ谷一夫さんや飛び入り参加で茂木健一郎さんにも参加してもらった。

鈴木健さんから、Open Courseware などによる教育革命が確実に起こっていて、それは巨大な隕石が落下してくるようなものであり防ぎようはない。そうした一方的な改革の流れにあるのだという自覚が大学人にはあるのか、という強い意見が出たのに対し、だれ

でもある種の場を求めている。その居場所としての大学論が必要で、それはまた世界の他の「居場所」ともデフォルトでつながれるところがすごいんだ、という小林康夫さんや茂木健一郎さんの意見が全体の議論の流れをつくり、楽観的な悲観論とでもいうべき感じになった。（教授・池上高志）

現代韓国研究センター 国際シンポ

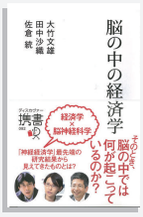
3 月 30 日、福武ラーニングシアターで国際シンポジウム「日韓における民主主義の変容と世論をめぐって―新たな市民的公共圏と政治変動」が、約 150 名の参加者を得て開催された。Hertie School of Governance のクラウス・オッフェ教授による「リベラル・デモクラシーの危機と革新―熟議は制度化できるのか」、崔章集高麗大学名誉教授による「市民運動的政治観に対する一つの批判―2012 年 12 月の韓国大統領選挙を中心に」という基調講演に引き続き、第 1 セッション「新しい公共圏と日韓の政治変動」と第 2 セッション「選挙とメディア」が、日本と韓国、ドイツの著名な研究者を迎えて行われた。

シンポジウムでは、とくに、メディア環境と情報行動の変化を踏まえて、日韓におけるリベラル・デモクラシーの現状と問題、そしてその未来に関して、多角的な討論が展開された。（特任助教・金伯柱）

Books

『脳の中の経済学』

佐倉 統 ほか著 / ディスカヴァー・トゥエンティワン / 2012 年 12 月



今、経済学と脳科学が融合し、新たな学際研究が盛んに行なわれています。行動経済学です。この本は、日本の行動経済学のエース大竹文雄先生と、彼の研究室の若き俊英・田中沙織さんに、佐倉が聞き役となってお話をうかがった入門書。2011 年のサイエンス・アゴラ賞受賞企画が元になっていて、読みやすいです。

『エピステモロジー ――20 世紀のフランス科学思想史』

金森 修 編著 / 慶應義塾大学出版会 2013 年 1 月

フランスの 20 世紀に成立した特異な哲学、エピステモロジーについて、私はいままで何度か紹介を試みてきた。本書は、この学統に詳しい若手を集めて、現時点で最良の展望ができるように編まれた論文集である。特に前半では数学や物理学の哲学に相当する業績について明快な解説が与えられている。手にとってみてほしい。

『リスクの中の東アジア （アジア比較社会研究のフロンティアⅡ）』

園田茂人編 / 勁草書房 2013 年 3 月

JSPS アジアアフリカ学術基盤形成事業「アジア比較社会研究のフロンティア」（2010-13 年）の成果・第二弾。アジアバロメーターの統合データを利用し、リスクを軸にアジア間比較を行った論文 9 本を集める。オレン・エイタンと金知允という学府博士課程学生２名の論文も収録されている。

あとがき

本ニューズレターの発刊からちょうど百年前、1913 年 5 月のパリでストラヴィンスキーによるバレエ音楽『春の祭典』が初演されました。初演は大混乱で怒号が飛び交いほとんど演奏ができないほどだったそうです。今では二十世紀を代表する傑作に挙げられる作品ですが、既存の理解を越えた真に新しいものが定着していく道程は平坦ではないということでしょう。研究活動も従来の常識にとらわれず混乱を恐れず突き進みたいものです。（暦本純一）

学環学府 39 6. 2013
東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
編集委員：暦本純一・前波奈保子・佐藤彩夏
mail：news@iii.u-tokyo.ac.jp / http://www.iii.u-tokyo.ac.jp